

カベルの日常言語哲学を通じたデリダの初期言語論の批判的再考 — 懐疑論の視点から

朱燁(京都大学大学院教育学研究科)

日常言語学派の J.L. オースティンから大きな影響を受けつつも、後期ワイトゲンシュタインに対する独自の解釈を展開したアメリカの哲学者スタンリー・カベル(1927—)は、その初期の著作 *The Claim of Reason*(1979)において、後期ワイトゲンシュタインの日常言語をめぐる議論を、懐疑論の反駁としてではなく、「懐疑論の真実」(the truth of skepticism)としていかに受け止めるかという点から再解釈している(Cavell 1979, p. 7)。懐疑論の真実とは、懐疑論は人間の知識を脅かすものとして論駁できるものではなく、人間がそれと共に生きなければならない条件であるということである。なぜなら、カベルによれば、懐疑論は単なる哲学上の問題にとどまらず、「世界の存在の問題を知識(knowledge)の問題と見なすあらゆる見方」であり(p. 46)、人間の知識が時折失敗することから免れえないことへの失望の表現であると見なしているからである。その点から、カベルは懐疑論を拒否しようとする哲学的な試みもまた懐疑論の現われの一つであり、懐疑論の真実に十分に開かれていないとして批判し、これらの懐疑論的な姿勢に対するオルタナティブとして、人間の有限性を引き受け、懐疑論とともに生きるもう一つの世界と他者への関わり方を「受諾」(acknowledgment)という観点から提案する。

本発表はこのような視座が哲学の思考様式と言語使用をとらえ直す画期的な射程とその有効性を例証するために、デリダ初期の言語論、『根源の彼方に——グラマトロジーについて』(1972)を取り上げ、これをカベルの懐疑論の視座から解釈し直す。カベルとデリダの関係は、哲学においても、両者においてもほとんど論じられていないが(cf. 『哲学の「声」——デリダのオースティン批判論駁』(2008))、そこには親近性と同時に、埋め得ない溝が存在している。表面的には、言語の自律性を重要視し、言語を意識内容に対する従属物と見なすことに反対しているという点において両者は共通している。しかし、デリダが差延運動を提起するのに対して、カベルは形而上学に囚われた言語の日常性への回帰を提唱する。この差異は単なる記述のスタイルや各々の所属する哲学伝統の差異ではなく、人間および言語の有限性に対する姿勢の差異であり、このことを根源的に明かしてくれる視座がカベルの懐疑論である。

本発表では、以下の手順に従いカベルの懐疑論の視座を通してデリダを批判的に読み直す。

第一に、『根源の彼方に——グラマトロジーについて』におけるデリダの批判の脱文脈性と真理の無限定性に着目する。デリダがソシュール、レヴィ＝ストロース、ルソーに向けた批判はそれぞれの文脈内でなされた限定的な真理主張を、無限定な真理主張と捉えることによって可能になっていることをそれぞれの文脈に即して明らかにする。(デリダ, 1972)

その上で、こうした読み替えを駆動するデリダの動機を、その語調から析出する。デリダは言語を真理の二次的、外的な付加物とすると彼が見なす議論を音声中心主義として批判し、言語の機能原理である「反復可能性」によって反復不可能な根源としての真理を幻想として退ける。しかし、デリダが幻想だとしている反復不可能な根源、真理に対する述べる語調は一貫して喪失と悲嘆という様相を呈する。こうした様相を、上で述べておいたカベルにおける懐疑論の失望と比較することを通じて、その近似

性を明らかにする。(ibid.)

以上の二段階の分析を通じて、カベルの懐疑論的視座からとらえ直されるデリダの言語論に内在する、まさに懐疑論に囚われた<懐疑論的な>姿勢が明るみに出される。それは、上述したように、デリダとカベルの間に横たわる溝の根源を、言語の有限性および人間の有限性に対する姿勢の違いとして示唆するものである。これは、デリダの提案する「差延」とカベルの言語の日常性における差異に最も鮮明に現れる。デリダの差延運動において、言語一般がカベルやワイトゲンシュタインのいう形而上学的な言語と同様に、常に具体的な文脈を喪失しており、したがってその具体的な意味を持ち得ず、意味が常に繰り延べされるという構造を取る。これに対して、カベルの日常言語において、判断はその都度、具体的な文脈の中で行われ、意味が先送りされることはない。言葉の意味やその使用の基準は、その都度の判断の中で発見しなおされ、一人ひとりの<私>が代替不可能な役割を果たし、<私>の<声>をその都度発見していく。

こうした差異を踏まえて、結論として、カベルの日常言語哲学が、哲学の仕方そのものを変容させる意義を持つものであることを明らかにする。

文献一覧

Cavell, S., *The Claim of Reason*, Oxford University Press, 1979.

Cavell, S., *A Pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises*, Harvard University Press, 1994.

Derrida, J., *De la grammatologie*, Minuit, 1967.

ジャック・デリダ『根源の彼方——グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思想新社、1972年。

スタンリー・カヴェル『哲学の「声」: デリダのオースティン批判論駁』中川雄一訳、春秋社、2008年。